

「ただいま」 「おかえりなさい」

北野小学校長 丹羽 郁人

私は、小学生のころ、首から家のカギをぶら下げていた。そういう子のことを、当時は「カギっ子」と呼んだ。

「ぼくって、カギっ子だね」

小さいころ、そう何気なく母に言ったとき、母が黙って泣くのがわかった。幼い私には、その涙の意味が分からなかった。

家に向かって通学路を歩き、カギを開け、部屋に入る。「ただいま」って言う。無人の部屋からは何の反応もない。薄暗い部屋の電気を点け、ランドセルを置く。そのままのかっこうで外に遊びに行くときもあったが、たいがいはテレビが友達だった。幼い私は、黙ってテレビを眺めていた。

不思議と淋しくはなかった。でも、学校であった楽しい出来事を早く話したい。できのよかったテストを見せてうんと褒められたい。そう思う日は少なくはなかった。

人はみな、抱っこされたり、よしよししてもらったり、だだをこねたり、一緒に笑ったりしながら、「**自己肯定感**」をもつようになる。

そのぬくもりに抱かれて「自分は大切な人間なんだ。生きていていいんだ。存在価値があるんだ。」という気持ちをもつ。

それは人が生きていくうえで、いちばん大切なことだ。

それは、

「生きる力」の根っこになる。

それぞれの家庭の事情はある。

大人だって、時間に余裕のないときも、疲れて動きたくないときもある。

やらなきゃいけないことに押しつぶされそう
なときばかりかもしれない。

だけど、……、抱きしめてあげてほし

い。うんと抱きしめてあげてほしい。

そして、話を聞いてあげてほしい。

「うん、うん。」「そうか、そうか。」おうむ返しでかまわない。

話を終えるまでずっと、ずっと聞いてあげてほしい。

私のいちばん好きな言葉は、……、「おかえりなさい」。

「おかえりなさい」は、その人の「居場所」に戻ってきたことの証（あかし）。あなたには「居場所」があるんだということを認めてくれること。

あの時、母は涙を拭かず、私をしっかりと抱きしめてくれた。

今なら、あの時の母の涙の意味が、痛いほどわかる。あの時、私は母から、一年分の「おかえり」をもらったのだ。

